

へり、その時だに、水ははやうあせはて、跡だに玄られぬと見えたり、まして今千年にちかき時に至りては、いかでそとも玄らるべき、玄かしながら古歌にとりては、あふ坂の關の清水にかけ見えて今やひくらん望月のこま、とよめるを思へば、關のかたはらに清水は流れて、往來に影のうつりけん事たがひなし、玄からばいづれ長明法師の云ひけん、山中なる事はいぶかしくこそ、たゞし今玄ばらくあたへて論はんには、その山中なりしは清水の源にて、流の末は關のわたりに出来るなるべし、又いまいへる所の清水は、いづれにもあれ、その流の末を認て、こ、こそ清水のあとよといひて、水上は尋ねぬにこそあらん、よりて此地形をよくく見はかるに、水はたとひ涌もいで、あせもすらめど、山のた、すまひのかはれる事有るべからず、此地桑田の海となるべきかたにもあらず、さらば關屋はたえて久しきことなりとも、關山は今も土俗の本關ごえともいへば、此所にたがひなし、よて思へば、今車道とて、牛車のかよふ路有り、此所にては、車道は北の方に有り、その所はいとひきく、道より見おろさる、所々もあれば、これらや古への小流のあとなどにやらん、今の世と成て、牛車の玄げくかよふにつけて、道行人のさまたげとなるをいとひて、その流を切落し、或はせきふたげて車の通路とせしにやあらんもまた玄るべからず、蟬丸の居りたりし所も、まさしく關のわたり成べきに、是も今は蟬丸大明神といふ神にいはひこめて、社た、し給ふ、是も二所有り、玄かし京の方なるが關山にもちかく、山のさまも舊めかしく見ゆ、さだかなる事は、その人の由跡だに玄れぬ事なれば、まして居けん庵の在る所も、千年の今には玄るべからず、是も此頃三井寺に在りし時、人の語りしは、志賀郡辛崎の西なる山の裾に、大井村とて、いささかなる里有り、今は穢多といふ乞食の住所なり、その村長を大江の某といへり、是は大江千里の後胤なりといふとかや、それさも有らん、大江村を俗に誤て大井村と云ふたゞし延喜帝の皇子の蟬丸の御供とて、此所にくだり住付て有りしといふは、うけられぬことなるべし、此類ひ世に猶多き物語な